
プロ野球全16球団レポート

ポールカラスコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プロ野球全16球団レポート

【Nコード】

N6787Y

【作者名】

ポールカラスコ

【あらすじ】

そういえば、この球団で前はと言うチームだったろう？、前はなんて言う名前だったけ？そんな時に役立つだろうこの小説。詳細まで載せているので、入門者は勿論、マニアまで楽しめる小説に。

プロリーグ

皆さん、プロ野球には昔、2リーグに別れたての時、セ・リーグは8球団、パ・リーグは7球団ありました。えっ！？15球団しかない！？そのとうり。あとパ・リーグに1球団途中にありました。その16球団はどのようなところだったのだろうか？10年ごとに迫っていく。（とっ、言うことは、最初の10年に16回かかるではないか！）

球団は読売ジャイアンツ、大阪タイガース、中日ドラゴンズ、広島カープ、国鉄スワローズ、大洋ホエールズ、松竹ロビンス、西日本パイレーツ、毎日オリオンズ、南海ホークス、大映スターズ、西鉄クリッパーズ、阪急ブレーブス、東急フライヤーズ近鉄パールス、高橋ユニオンズこの16球団が1950～1960年までのチーム一覧 合併、ネーミング変更あり

栄光で終わり（前書き）

少し間が空きました。すみません

栄光で終わり

松竹ロビンスこのチームの名前を聞いたことがあるだろうか？

このチームの前身は大東京軍。1936年創設の老舗だった。そして1950年2リーグ制始めてのセ・覇者となる。それも98勝は今でもセリーグ記録である。（1955年に南海が98勝で抜いたのでプロ野球記録ではない）この年はエース真田の39勝、小鶴はシーズン51本の当時の日本記録を打ち立てた。がしかし、田村駒と言う経営者は相当の赤字。なので巨大戦力を放出。一気にチームレベルは下がった。その為に1951年4位に。リーグの代表者会議でシーズン勝率3割を切った球団には処罰を決めるという申し合わせがされていた。その裏には、球団数が奇数で日程が組みにくいことから、下位の球団を整理する意図が含まれていた。その年の松竹ロビンス34勝84敗2分で勝率・288で3割をきる。赤字もあり、近鉄に身売りと言われる。だが一旦は来季も相続と発表。しかし、1953年初頭大洋水産と合併で合意球団名を大洋松竹ロビンスに。その短い球団歴に幕を閉じた。

松竹は東映に対抗するだけで球団を持ったため、野球に対する情熱は全く無かったため、1954年を最後に完全に手を引き大洋ホーリーズに戻った。

栄光で終わり（後書き）

次回は短すぎる高橋ユニオンズ編です

最短球団

チームのスポンサーは戦前イーグルス（後楽園球場がスポンサー）のオーナーでもあった高橋龍太郎。1953年当時、パ・リーグは7チームで構成されていたが、1チームの端数が生じるため全チームがそろって公式戦を開催できないでいた。そこで、勝率3割5分を切ったチームは強制的に解散という罰則を設けたものの、罰則適用チームはなかった。

そのため1954年のシーズン開幕前に高橋をスポンサーに「株式会社高橋球団」を設立。急造だったためパ・リーグ各チームから若手を供出するよう申し合わせがされたが、実際に集められたのは酒豪で扱いに手を焼く選手や戦力外の選手が大半だった。こうして高橋ユニオンズは結成された。ちなみに愛称の「ユニオンズ」は「寄せ集め」という意味ではなく、高橋が戦前経営していた大日本麦酒の主力商品だった「ユニオンビール」からつけられたものである。

本拠地は神奈川県にあった川崎球場。予算も選手も限られた寄せ集めとあってチームの士気は今ひとつ。成績も低迷し、悪いムードを払拭するべく1955年にトンボ鉛筆と業務提携しトンボユニオンズとチーム名を改称するも改善の見込みなく、1年で提携は解消し1956年にチーム名は再び高橋ユニオンズに戻った。本来、野球に興味のなかったトンボはやる気はなかったが、1年だけ冠企業になつてもらえるようパ・リーグが頼み込んだため、解消は事前に打ち合わせがあったという話もある。

その後資金繰りが悪化したことや、8チームでの試合編成が多すぎたことから、1957年2月26日に大映スターズと合併して大映ユニオンズ、更に1958年3月10日に毎日オリオンズと合併し

大毎オリオンズとなった。

なお、大映ユニオンズと大毎オリオンズの後身・千葉ロッテマリーンズのそれぞれの球団史において高橋ユニオンズは傍系扱いであり、結成年度・その他記録は一切カウントされない事になっている。

元高橋ユニオンズの選手の佐々木信也によると、観客が30人に満たない状況もあった模様。宇佐美徹也の著書『プロ野球記録大鑑』（講談社）に3年間の観客動員数の記載があり、1954年140試合で21万2千人、1955年141試合16万3千人、1956年154試合13万6千人とある。これは水増しも含めた数字と推測される。このため3年間の観客動員数は阪神・巨人戦の9試合分ともいわれた。また、佐々木は高橋の大映への合併に関して「チームが大映ユニオンズ（高橋との合併球団）（15人）、東映フライヤーズ（6人）、近鉄パールス（4人）、解雇（7人）の4グループに引き裂かれた」という経緯上、（野球体育博物館の職員に対して）合併というよりは球団解散に表現を改めるべきだ」と唱えている。

1969年に石川進が選手引退したのを最後に、高橋ユニオンズに在籍経験のある現役プロ野球選手はいない。

2004年11月に東北楽天ゴールデンイーグルスがプロ野球に参入した時、1954年の高橋ユニオンズ以来50年ぶりのプロ野球の新規参入球団と報道された。

1955年、同球団所属のヴィクトル・スタルヒン投手が日本球界初の300勝を達成。この年でスタルヒンは引退したため、スタルヒンの記録が報道される時は、所属球団欄に（トンボ）と表記されている（なお球団の契約選手第1号はスタルヒンであった）。また1956年には、のちにプロ野球ニュースキャスターとして有名な

になる佐々木信也が入団、新人でありながら全試合（当時は154試合）・全イニング出場・リーグ最多安打・ベストナインと活躍している。

監督以下、選手も古手揃い、強面揃いで、打席に立つとキャッチャーに「おい若えの、イン（コース）の高めだ」などと凄み、その通りに投げさせるが空振りした。応援団も柄が悪く、試合中に球審の名を呼んで「おい、入院したいか」などとヤジるのはしゅっちゅうだった。

一方でチーム内の雰囲気は暖かく、サヨナラエラーを犯した佐々木を誰も責めず、抱えあげてベンチに連れて行った選手もいたという。佐々木は当時「ああ、なんていいチームなんだ」と思ったが、後年「そんな高橋だから弱かったんだろう」と振り返っている。佐々木は最後のキャンプで撮った写真を今も大事にしているという「1」。ドン・ブッサン外野手は打球に対して必ず一歩前進してからバックしていた。ある時、レフトへのゴロヒットをトンネルしてしまい、塀に向かって走ったが、塀に当たってはね返ってきたボールをまたトンネルし、ショートが拾うという珍プレーを演じた。

高橋ユニオンズの最終ゲームは、1956年10月8日に浦和市営球場で行われた、毎日オリオンズとのデーゲームである。2年連続勝率が3割5分に達せず、解散の危機に瀕していた高橋を毎日ナインは気の毒に思い、先発の中川隆はど真ん中にボールを集めるも、高橋打線は打てず。四回から交代した植村義信はうまく点を与え4-1となった。しかしこれで安心したのか、9回に毎日点を取ってしまい4-3と1点差となって、なお二死満塁。カウント2-3で押し出して同点、あるいは一打出れば逆転サヨナラ負けという局面となった。「2年連続制裁金500万円納入か、または解散か？」と静寂する高橋ベンチと反対に、毎日ベンチは「フレ、フレ！」の大喝。実はこれは「打て」の意味でなく、「振れ、振れ」という八百長紛いの意味。ピッチャー・伊藤四郎の運命の一球は、「ストライク！」と球審の右手が高く上がりゲームセットとなり、この

年の高橋の最終勝率は、三割五分〇厘六毛四糸九忽三微（0.3506493）となり制裁金は免れた。しかし、この努力もむなしく翌年2月に大映スターズと合併し球団は消滅した「2」。

ユニオンズの「解団式」は1957年2月、キャンプ地の岡山県野球場で行なわれた。フェンスには「高橋ユニオンズ解団」と書かれた横断幕が貼られ、チーム全員で記念撮影を行なった後に選手が一人ずつ他球団担当者の元へ呼ばれ、それが移籍先となった。多くの選手が移籍先が決まる中、呼ばれなかった15名はそのまま球界を去ることとなったという「3」。

ジャイアント馬場は高校2年の時チームメイトの捕手からトンボユニオンズのテストと一緒に受けないかと誘われたことがある。受けるか受けまいか迷っているうちに巨人から誘いが来て、のちに入団した。

何の球団？西日本パイレーツ

プロ野球が2リーグに分裂した1949年シーズンオフにセントラル・リーグに加盟。親会社は西日本新聞社。本社のある福岡市の平和台野球場を本拠地とした。パイレーツ（Pirates）は英語で「海賊」の意味。

本来は西日本鉄道（以下、西鉄）と共同で球団を立ち上げ、球団経営は西鉄、広報は西日本新聞社が担当する予定だったが、私鉄連合としてパ・リーグに加盟しようとした西鉄に対して西日本新聞社は政治・経済のニュースを読売新聞社（読売ジャイアンツの親会社）に依存していたため、読売の勧めで独自に球団を持ち、セ・リーグに加盟することになった。

しかし読売の提唱した「セ・リーグ6チーム化（広島と大洋を合併、西日本は解散）」に反発、巨人総監督・三原脩を新監督に据えること「1」でチーム力向上を目指したものの、この時に青田昇も三原についていくと宣言したことから事態が紛糾、リーグ内で孤立してしまう。

1951年の開幕前に「読売の横暴に耐えられない」との声明を発表、電撃的にパ・リーグの西鉄クリッパースと合併し、西鉄ライオンズとなった。合併の際、巨人が「西日本の選手の保有権はセ・リーグにある」という主張をし（当時、野球協約は発効されていなかったため）、それが通って、結果として南村脩広・平井正明は巨人に移籍している（日比野武は一時拘束されたが後に西鉄に復帰）。

なお、西鉄ライオンズの後身・埼玉西武ライオンズの球団史において西日本パイレーツは傍系扱いであり、結成年度・その他記録は一

切含まれない。また、リーグが分裂してから最も早くプロ野球界を去っていったチームでもある。

第二期黄金期

1950年に復帰した水原茂を監督に据えて、リーグ分立1年目の同年こそ優勝を逃すものの、翌1951年からは同年に獲得した与那嶺要の活躍もあってリーグ3連覇、日本シリーズでは1リーグ時代からの宿敵南海を3年連続で降し日本シリーズ3連覇を達成。第2次黄金時代を築き上げた。1952年8月8日、広島11回戦の勝利で日本プロ野球史上初の公式戦通算1000勝を達成。1000勝時点の通算成績は1000勝518敗38分、勝率・659。1953年には初めての海外キャンプをサンタマリアで行う、この年は開幕から一度も2位に転落することなく優勝、シーズンを通しての1位独走優勝は球団史上唯一の記録である。

1954年は杉下茂擁する中日ドラゴンズに優勝を奪われ2位となるが、1955年にはリーグ優勝。日本シリーズでは南海ホークスとの対戦となり、1勝3敗からの3連勝して逆転日本一を達成する。この頃から第2期黄金時代を支えた千葉茂、川上哲治らに衰えが目立ち始め、水原は新旧交代をしなければならなくなった。

翌1956年もリーグ優勝を果たし、日本シリーズでは水原と入れ替わりに巨人を退団した三原脩監督率いる西鉄ライオンズとの対決となる。以後3年連続して日本シリーズで対決となり、両者の戦いは「巖流島の決戦」とマスコミに喧伝された。いずれもライオンズに軍配が上がり、特に1958年の日本シリーズでは、第1戦から3連勝するも、第4戦から稲尾和久の力投などで4連敗を喫する。1959年もリーグ優勝は果たすが、日本シリーズでは南海ホークスの杉浦の力投の前にストレートの4連敗を喫する。

西鉄の奇跡

起源は1949年暮れに、1リーグ体制だった連盟が2リーグに分裂。これを契機に村上は、後の西鉄3代目社長で球団オーナーも務める木村重吉らとともにプロ野球への進出を図り「2」、福岡県福岡市で西鉄クリッパース（にしてつ・Nishitetsu Clippers）を結成。11月26日に発足したパ・リーグへ加盟（この加盟日が球団創立日とされている）し、1950年1月28日に運営会社「西鉄野球株式会社」を設立登記した（この日を球団創立日とする文献も存在する「3」）。

選手は、ノンプロとしての西日本鉄道チームから初代監督となる宮崎要を始め大津守・深見安博・河野昭修・塚本悦郎ら、八幡製鉄の鬼頭政一ら、別府星野組の新留国良ら九州地方のノンプロ選手に加え、佐賀県出身で巨人の主戦投手であった川崎徳次、福岡県出身で前年度南海で20勝を挙げた武末悉昌、同じく福岡出身の野口正明ら、九州出身のプロ球界の有力選手を集めた。

1951年1月30日、同じく福岡市を本拠地としていたセ・リーグの西日本パイレーツを吸収合併して西鉄ライオンズ（にしてつ・Nishitetsu Lions）となる（球団名変更は3月1日）。西日本からは、後の黄金時代の主力となる関口清治・日比野武が加入。

1952年、シーズン途中に、契約が難航していた東急の大スター大下弘を深見安博とのトレードで獲得。

1954年は2番打者豊田泰光の18本に続き、クリーンアップ全員が20本塁打（中西太（31本）・関口清治（27本）・大下弘

（22本）を記録する等、チームで両リーグトップの134本の
本塁打を記録し、チーム結成以来初のリーグ優勝を飾る。

1956年～1958年に三原脩監督の下日本シリーズ3連覇を達成。このうち1958年は稲尾和久の好投で3連敗から4連勝を飾る。稲尾を始めとしてこの当時の主力には大下弘・中西太・豊田泰光・仰木彬・高倉照幸らの好選手を擁し「野武士軍団」と呼ばれた。

1959年中西太が手首の腱鞘炎で不調だったこともあって4位に
終わり、三原監督が辞任。川崎徳次が監督に就任する。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6787y/>

プロ野球全16球団レポート

2011年11月26日19時00分発行